

DN GL

災害看護 Disaster Nursing Global Leader Degree Program

グローバルリーダー養成プログラム

NEWS LETTER

VOL.2

4月 2015

C
O
N
T
E
N
T
S

- Message from the president, DNGL News1 2
- Education Plan 3
- Enrolled Student Voice 4
- DNGL News2 6
- Message from teachers, Health Emergency and Disaster Nursing (HEDN) .. 8



 高知県立大学
University of Kochi

 公立大学法人
兵庫県立大学
UNIVERSITY OF HYOGO

 TMDU
東京医科歯科大学

 CHIBA 千葉大学
UNIVERSITY

 日本赤十字看護大学

「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」は、我が国初の国公私立5大学院からなる共同大学院です。

Message

プログラム責任大学 学長からのメッセージ

近い将来に発生が予想される南海トラフの巨大地震の可能性、更には自然災害だけではなく、テロや新型インフルエンザなど未曾有なものへの対策も急務であり、その為には、国際力、学際力を備えたイノベティブな人材育成が必要です。そこでこれまで災害看護学を牽引してきた高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学、日本赤十字看護大学の国公私立の5大学院が一丸となり、人間の安全保障を共通理念とし、それぞれ蓄積してきた資源を共有し、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、国際的・学際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する「災害看護グローバルリーダー」の育成に取り組むことに致しました。

皆様方には、本プログラムの災害看護教育・研究の活動に一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

高知県立大学 学長 南 裕子



開講式典

高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学、日本赤十字看護大学で構成される大学院博士課程共同災害看護学専攻の開講式が、2014年4月5日(土)午後1時30分から高知県立大学池キャンパスの共用棟大講義室で行われました。

入学生は、5つの大学からの11名でした。国公私立に

よる日本初の5大学共同の博士課程は、多くの困難を乗り越え開講まで辿りついた教職員の安堵感、未知の世界に挑戦する11人の学生たちの期待と不安、このプログラムを担っていく5大学長の学長をはじめとする大学関係者の責任の重み、そんなさまざまな思いが錯綜した開講式でした。



教育の構想

共同大学院教育課程

災害看護の高度な実践力の育成

5年間通して実践的な演習を行い、特に1~2年次を中心に実施します。

例えば、長期避難をされている人々の健康調査と健康支援の企画・実施、結果の集計・分析、災害拠点病院や自治体との共同研究などに参画します。

また、他機関協働(行政、病院、学校、企業、住民組織)による地域防災プログラムなどを通して、多職種連携やチームリーダーとしての能力も修得します。

臨地実習指導者、メンター、プリセプターなどの協力体制を整えて、指導にあたります。

教育能力の育成

1~3年次を中心として、単なるTA(ティーチングアシスタント)としてではなく、学生のそれまでの経験等に基づき、個々の学生が継続して教育能力を修得するための企画・実践ができるよう指導します。

教育・研究開発、研究インターンシップ制度により研究能力の育成

異業種・異分野(学問)交流:グローバルリーダーの資質を養うために、「演習」や「実習」において学生の積極的な国内外の異業種交流や異分野交流の機会を数多く設定し、学際的視点を育みます。

3~5年次を中心として、企業や行政との共同研究体制及び研究インターンシップ制度、RA(リサーチアシスタント)制度を取り入れながら、実践的研究能力を養います。

インターンシップの実践性を備えた企画力や開発力の育成

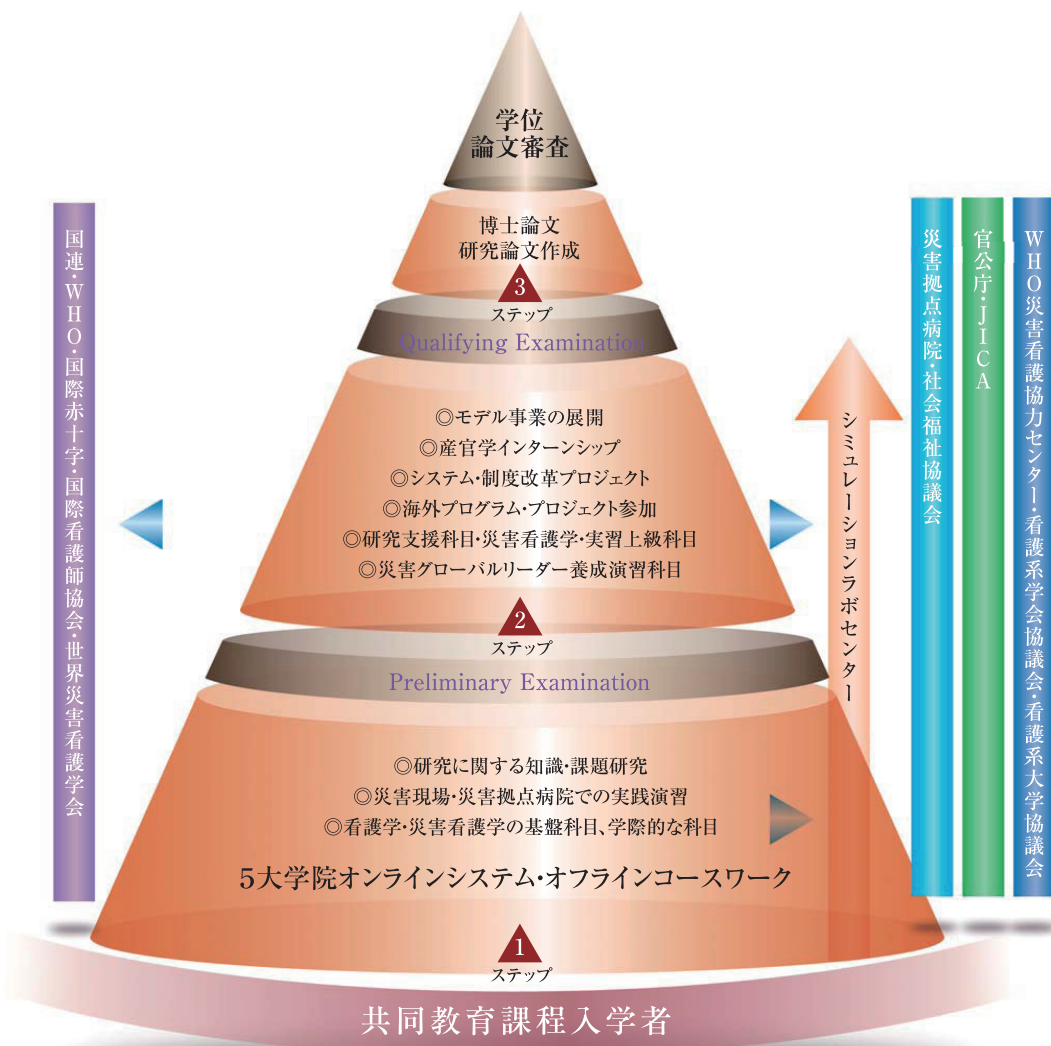
産官学・研究所等から特任教員、非常勤講師による指導やメンター等の環境整備を行います。

これまでの看護職の教育内容としては全くなかった、社会へのアピール方法とアピールの実践、マスコミ対応術や記者会見等のスキルを学びます。

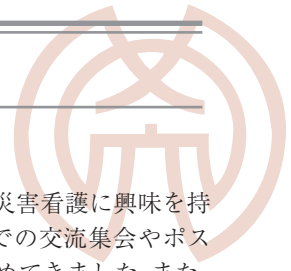
また、「災害看護グローバルコーディネーション論」「災害看護リーダーシップ論」では、アサーティブトレーニングなどの講座、研修、実地訓練の機会を設けます。

養成する人材像

- 3 Step 国際的・学際的な基盤で研究開発し、産官学と連携し、変革に向けて提案推進できる人材
- 2 Step 災害サイクルのすべての段階で「健康に生きるための政策提案」をできる人材
- 1 Step 災害時にもその人らしく健康に生きることを支援できる人材



高知県立大学 University of Kochi



諸澤 美穂

途上国での看護経験や福島復興支援の経験などから災害看護に興味を持ち、大学院に入学しました。この一年、授業以外にも学会での交流集会やポスター発表、地域情報訓練など様々な活動を通して学びを深めてきました。また、他大学も合わせたクラスメートのバックグラウンドは様々で、毎日沢山の刺激を得ながら楽しく学ぶことができています。色々な壁にぶつかり自分自身の力不足もひしひしと感じながらも、一步一步少しずつ前向きに進み、多角的な視野で世界の人々の役に立てる災害看護の専門家を目指していきたいと思ひます。



西川 愛海

大学院に入学し約一年が経ちました。この一年は目まぐるしいものでしたが、TV会議を通じた講義・シミュレーションや集合授業などからたくさんの知識や技術を学ぶことができ、また海外でも様々な経験を得ることができました。さらに高知県立大学では地域の方たちと共に減災に関する訓練を行い、コミュニティでの減災力を高める重要性を再認識することができました。今後も授業は勿論、地域や海外での学びを大切に、自分の研究テーマに関しても深めていきたいです。

千葉大学 Chiba University



CHIBA
UNIVERSITY



波多野(雑賀)祐子

DNGL1年次のプログラムでは、講義や演習に加えて、様々な課外学習の場を通して、看護学以外の防災関係の動き、視点をも得ていく日々でした。特にフィンランドで行われた災害シミュレーションサバイバルキャンプでは、飢えや疲労を経験し、多国籍の学生とのチームビルディングやリーダーシップを体験しました。これらの学びをさらに広め、深め、そして統合し、実践に還元できることを目指していきたいです。



添田 沙織

DNGLが開講してもうすぐ1年になろうとしています。これまで私達は、TV会議システムを通じて災害実践の経験が豊かな講師陣による内容の深い講義や、集合実習による実践的なシミュレーションなどから、災害時に必要な知識を5大学で共同しながら学んできました。また、国際学会などを通じて国際的視野の維持や向上を目指しています。この1年で学んで得た内容を、2年次の実践と研究に結び付けられるよう努めていけたらと思ひます。

兵庫県立大学 University of Hyogo



隅田 さやか

新卒で入職した救命救急センターで災害看護に関心を持ち、日本と海外での臨床経験を経て入学しました。5年一貫ということで覚悟が必要でしたが、進路に迷った時にこのプログラムを見つけ、受験し合格できたことは運命だと思っています。

国内初めての共同大学院。最初は戸惑いも多かった遠隔講義も、慣れれば遠方の学生や教員とつながりを持てる、革新的なプログラムであることを実感しました。学会や集合授業での対面機会を通して徐々に親睦を深め、今は心強い仲間とともに学べることに感謝しています。



松尾 香織

兵庫県立大学の松尾です。この1年を振り返ると、看護師として働く環境から学生生活へと変わり、あっという間に過ぎたという印象があります。本当に多くのことを学ぶことができた充実した時間でした。災害看護をあらゆる角度から学び、そしてその在り方や災害看護に求められていることを考えました。また、同じ思いを持つ仲間と出会い話し合ったり、見聞を広げるために様々なイベントに参加したりして刺激を受けました。このような充実した環境で学べる喜びを感じ、今後は自分が興味ある分野をさらに追及していきたいと覚悟を新たにしています。

日本赤十字看護大学 Japanese Red Cross College of Nursing



池田 稔子

DNGL課程での1年間に、災害看護に関係が深い医療や福祉学だけではなく、心理学、社会学、情報科学などを学びました。また、海外学会やセミナーへの参加も、2月に台北で開催された海外学会では、初めて英語でのポスター発表を行いました。私はこれまでに、国内外での災害救援を経験しましたが、この課程での学びが新鮮で、実践のエビデンスを得たり、研究的な視点が身についていくように感じます。入学当時は進学したことを迷ったりもしましたが、今は、DNGLを選んで学んでいることに満足しています。



齋藤 結香

私は、東日本大震災で甚大な被害を受けた福島県と宮城県で短期インターンシップに参加しました。また、アフガニスタンの病院に勤務する現地の医師や日本人看護師と紛争による危険地帯での活動について直接討論をしたり、フィンランドでの災害救援活動に関するキャンプへ参加もしました。これらからの学びは、国や文化や習慣が異なっても支援の本質は共通していることです。本プログラムは実践に生かす教科が多く、国外の災害支援現場で働く私の将来の夢を叶えるため、5大学の仲間と共に知識や技術を研鑽しています。

東京医科歯科大学

Tokyo Medical and Dental University



TMDU

東京医科歯科大学



小川 裕美子

非常に多くの講義を受け、災害に関する幅広い知識と実践を体系的に学ぶことのできた一年でした。テレビ会議システム上でも活発に行われるディスカッションを通して、自分の考えをまとめ、意見を述べる訓練を積み、その経験がリーダー能力の礎となっていくのだからと感じています。英語での講義を受け、海外のサマースクールや国際学会に参加し、異文化コミュニケーションを行いながら国際的な視点をも学び、充実した日々です。



田中 加苗

常に全力疾走の1年間でしたが、今年は今後のための種まきの時期だったという風を感じています。国内外の学会、地元のセミナーや勉強会、災害や防災という名のつくところには学生で誘い合って足を運び、名刺を配って災害領域の仲間に入れてもらえるようにアピールしました。災害看護の全体像を捉えるには看護、医療だけでなく多角的な知識が必要であることがよく理解でき同時に焦燥感もありますが、個々の点として散りばめられた知識と技術を2年目には線で繋ぎ、研究という形で実らせたいと思っています。



鈴木 陽子

私たちは1期生であり、試行錯誤の日々が続きますが、とても恵まれた環境で勉強しています。本専攻の講義や演習に加え、地域の大規模テロ訓練、他大学の緊急被ばく医療研修、海外のサマースクールなど、国内外問わず研修や学会に参加し、幅広い視点で災害について学んでいます。異なる場で学ぶ他大学の学生とは、直接会う機会は少ないですが、様々な方法で工夫し交流を図り、より良い関係を築いています。

外部評価



2014年11月3日、4日の2日間、高知県立大学にてDNGL外部評価委員会が開催されました。外部評価委員は、米国の災害看護に関わる大学教員、米国の救急医療に関わる医師、日本の地域医療に関わる医師、そして日本の危機管理を専門とする大学教員です。2日間の評価では、本共同災害看護学専攻の説明とともに、国際力、学際力、産官学連携力、実践力を育成する教育に関して説明した後、シミュレーション教育と遠隔授業による教育環境の視察および学生へのインタビューも含め、総合評価をして頂きました。講評では、運営陣、教員陣、カリキュラム、学生の4つの視点の評価があり、12項目のリコメンデーションが提示されました。

第3回世界災害看護学会

2014年6月21日、22日の2日間、中国の北京にて第3回世界災害看護学会が開催されました。世界災害看護学会は、日本の看護職が中心となり立ち上げた国際学会です。北京大会は、DNGLの学生にとってはメンバー揃っての初めての海外研修となり、世界から集まった災害看護の専門家の講演や研究発表のセッションに参加しました。また、インドネシア、中国、香港、韓国そしてDNGLの学生による交流会を企画し、同じ災害看護学を学ぶ仲間として、国際交流を行いました。



日本災害看護学会

2014年8月19日、20日に日本災害看護学会第16回年次大会(京王プラザホテル他)に参加しました。メインテーマは、災害看護:「もの」のデザインと「こと」のデザイン。災害が起きた場所(被災地)において、看護という「こと」をどのようにマネジメントして提供するのかといった「ことのデザイン」そして、災害看護を取り巻く環境の中から建物や場、道具、ツールなどの設定や使い方といった「もののデザイン」についても焦点を当てたテーマに沿った企画が行われていました。

8月20日(水)にはDNGLの学生による交流集会「学生の視点から見た災害看護グローバルリーダー養成プログラムの実際～グローバルに活躍できる災害看護のリーダーを目指して～」が行われました。学生の視点からのDNGLのプログラムの実際が紹介され、災害看護専門看護師とグローバルリーダーとの違いなど、参加者とともに活発なディスカッションが行われました。



第18回 East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 参加

第18回EAFONS(East Asian Forum of Nursing Scholars)が、2015年2月5日、6日の両日、台湾の台北にて開催されました。DNGLの学生は初日の午後、Meaning in Life of Relocated SurvivorsやPost-earthquake Experience of Disabled Survivorsなどの研究が発表されたDisaster Nursing のセッションに参加し、講演内容

に対して質問をしていました。また、翌日の6日には、ポスターセッションがあり、DNGLの学生4名は、これまで行った調査研究、あるいは海外での研修の報告等を行いました。多くの学生が、初めての国際会議での発表でしたが、災害看護に興味のある東アジアの看護職と議論を交わすことができました。



教員からのメッセージ



Message

充実を越えた一年となったのではないのでしょうか。

共同災害看護学専攻の最初の1年が終わろうとしています。11名の学生と共に教員も日々新たな挑戦に遭遇する刺激的な一年でした。国際プロジェクトを担当させていただいていますが、この一年、世界災害看護学会(北京)での大学院で学ぶ学生セッションを皮切りに、日本国内での国際セミナーや台湾でのEast Asian Forum for Nursing Scholars (EAFONS)、仙台での国連防災世界会議など、その度に学生諸氏は己の目標と照らし合わせた学びを重ね、国際的に発言し活動することの手がかりをつかみ取っています。これらは共通する一部の経験で、各大学でも共同研究やフィールドスタディ等の活動が平行していますので、充実を越えた一年となったのではないのでしょうか。次の展開を、ワクワクしながら見守ることにします。



兵庫県立大学教授
片田 範子

「減災を広く見て看護がどう関われるのか」ということを探求

災害は突然、未解決の健康危機と相互に影響を及ぼします。私たちは人間の安全保障の為に「減災を広く見て看護がどう関われるのか」ということを探求し社会に還元する減災看護モデルの構築に取り組んでいます。今年度は国内外の機関と学問領域も超えた研究者と減災看護に関する情報アプリを試開発しました。またその実証実験のために、学生さんと一緒に一昨年台風ヨランダで甚大な被害のあったフィリピンレイテ島やタクロバンや高知県須崎市などでフィールドワークも行いました。これらの研究は早く社会に還元される事を目指して企業や官公庁と連携しながらすすめています。来年度もまた多様な背景を持った学生が入学し、一緒に様々な取組が出来ることを楽しみにしています。



高知県立大学准教授
神原 咲子

HEDN について

世界初、 災害看護国際学術雑誌HEDNスタートし1年が経ちました!

看護職は災害の現場において、発災直後から復興に向け、あらゆる年代の個人および家族、集団、コミュニティを対象に、幅広く活動してきました。そこで災害看護の知を集積し世界へ発信するために世界初の災害看護国際学術雑誌Health Emergency and Disaster Nursing (HEDN)を立ち上げ、すでに1年が経ちました。HEDNはオンラインをベースとしたジャーナルで、投稿、掲載料は無料です。

災害看護の知を結集し、リアルタイムの情報を発信するため、教員、研究者、臨床家、学生、活動家など、様々な場で尽力する方々の原稿を募集します。

詳細は <http://hedn.jp>

